

「人類学本土化在中国」
国際シンポジウム参加記

蕭 紅燕*

去る9月のはじめ、広西民族学院の主催で「人類学本土化在中国国際シンポジウム」(‘99 International Symposium on the Nativization of Anthropology)が中国広西省南寧市で開催された。

シンポジウムは3日間にわたって議論が展開され、人類学・民族学・民俗学・政治学・考古学・歴史学など多分野の参加者から、中国における人類学の本土化という中心問題をめぐって、活発な発表と議論がおこなわれた。海外からの参加者は次のとおりである。

East Asian Institute, Columbia University 政治学専攻の白思鼎 (Thomas P. Bernstein), Professorial Research Associate Department of Anthropology, The London School of Economics and Political Science 王斯福 (Stephan Feuchtwang) 教授 (『帝国的隠喩』¹⁾), イギリスオクスフォード大学社会学系彭軻 (Frank Pieke) 教授 (『華人と華僑』), Social Psychology Research Group University of Seville, Seville, Spain 迪西柯 (Gabriel Decicco) 教授, フランス国家科学研究センター, 華南及びインドシナ半島人類研究所雅克勒・穆瓦納 (Jacques LEMOING) 教授。

そして、香港・台湾からは、香港中文大学人類学系の陳志明教授と台湾東華大学の喬健教授が出席した。

中国国内の研究者は多数参加した。主催校である広西民族学院学報編集部徐傑舜教授 (『漢民族發展史』四川人民出版社1992), 中山大学人類学系周大鳴教授 (『現代都市人類学』中山大学出版社1997), 容観復教授 (『文化人類学与南方少数民族民族』広西民族出版社1991, 『民族考古学初論』広西民族出版社1992), 黄淑娉教授 (女) (共著『文化人類学理論方法研究』広東高等教育出版社

※高知大学人文学部助教

1998), 陳運飄副教授, 張鋒講師, 中央民族大学民族学系王建民教授 (『中国民族学史』上下冊 雲南教育出版社1998), 北京大学社会学・人類学研究所王銘銘教授 (『社区的歷程--溪村漢人家族的個案研究』天津人民出版社1997), 中国社会科学院民族研究所納日碧力戈副研究員 (『姓名論』社会科学文献出版社1997), 張繼焦副研究員 (『市場化中的非正式制度』文物出版社1994), 広西民族学院民族研究所所長張有雋教授 (『瑶族伝統文化變遷論』, 広西師範大学中文系覃德清副教授, 広西民族研究所覃乃昌所長 (『壯族稲作農業史』広西民族出版社1998), 広西民族研究所李富強主任 (『壯族体質人類学』広西民族出版社1998), 厦門大学彭兆榮教授 (『生存於漂泊之中』上海文芸出版社1997), 雲南大学人文学院中文系黄澤教授, 馬京副教授, 広東省民族研究所陳延超研究員, 広東省民族研究所・宗教研究所理論研究室主任, 李筱文副研究員 (女), 広東省博物館楊豪教授, 湖北大学中国文化研究院鐘年教授 (『中国人的伝統角色』湖北教育出版社1999), 吉首大学民族研究所羅康隆所長 (『族際關係論』貴州民族出版社1998), 浙江省師範大学陳華文教授 (『民俗文化学』天津人民出版社1998), 上海文芸出版社徐華龍副編審 (『中国鬼文化』上海文芸出版社1991) などの方々が参加した。

日本から筆者もこのシンポジウムに参加したが、非常に新鮮な刺激を受けた。

それでは、筆者にとってとくに興味深いと感じたいいくつかの発表をご紹介しますと思う。

まずイギリスの彭軻 (Frank Pieke) 教授が「本土化あるいは地方化--中国人類学における新たな意義と平等の道になるのか?」(Indigenization or Localization: a Strategy for a New Relevance and Equality for Chinese Anthropology?) と題する発表のなかで、問題提起をした。その主な論点は、次のようになっている。

「昨今の非西方社会では、経済的にも知識の上でも發達国の西方国家への依存度が次第に薄くなってきた。かれらはあらゆる学科の發展において、より一層の独立性を求めようとしている。

人類学も当然ながら、例外ではあるまい。人類学という学科の歩みを概観しても、既成の理論が発展の重荷になるようなことは一度もなかった。事実、総合的の学問としての人類学がもっている独特な、いわゆる人類学的特徴をもつ理論体系というのは徹々たるものに過ぎない。

そして、中国は『発達途上の民族』ではなく、世界経済を支える重要な支柱の一つとなりつつある。中国は悠久な文化伝統を有してはいるものの、文化人類学的な探求がまだまだ日が浅いといえよう。二十一世紀を目前にして、文化学科としての理論的上台を探求する指導的な思想を打ち立てることがわれわれの努力目標であろう。この理論的上台が拠り所にしてはいるのは、中国独特の文化伝統にはかならない。過去そして現在もしかりである。

中国の人類学者にとって、人類学の分野における西方人類学者の研究成果に対して、十分な分析を加えたうえで、さらに一歩進んでみずからの文化伝統をふまえてこれらの成果を見なおす必要がある。

要するに、『本土化』を人類学の『国家化』との間に一線を画してほしい。この偉大な民族の領域で非中国人のフィールドワークと研究活動は妨害されてほしくない。

続いて、王斯福(Stephan Feuchtwang)教授は「本地化あるいは本土化-中国人類学が新たな関連性あるいは平等の戦略を求めているのか？」のなかで、具体的提案と注文を出している。

「中国人類学にとって、自国文化および『少数民族』研究にのみ従事するような、いままでの狭隘なやり方を変えるべきである。中国以外での実地調査を中国人によって行われることのほうが、より大きな意味をもつものである。つまり、海外でのフィールドワークをふまえた理論面での貢献により、中国人類学が欧米あるいは日本人類学にひけをとらず、対等にふるまうことができる。中国人類学においては、ただ他人に面白いデータ、または優秀な学生を提供するだけではなく、他国の人類学者の興味をそそる

ような論点を提起すべきである。

モーリス・フリードマン(Maurice Freedman)が1962年に予言した『社会人類学の中国時代』の到来は明らかに、時期尚早のようである。しかしいま、われわれが直面している問題は、このような状況に対して何ができるか、あるいは何をすべきかである。

中国人類学にとって、フィールドワークがすでに数十年の累積があるとはいえ、不思議なことに、概念の創出と議論に欠けている。たとえば、かれらは『族群』(ethnic group)と個人の関係を研究しているのに、重要な社会問題については、避けてきたのである。したがって、この領域での研究成果があまり特色がなく、一般論に終わってしまった。その原因は海外の中国人類学者にある。海外の中国人類学者たちは、中国社会との直接的な接触が少ないうえ、本土の人類学者との交流をはかることにも無関心のようなのである。海外の中国人類学者にみられるこのような状況を打破するためには、重要な問題をめぐって率直に意見を述べ合い、深く考察することがきわめて大切なことと思う。また、かれらは本土の仲間たちと共同研究をし、議論を戦わせることも必要であろう。

要するに、中国本土の人類学者にとって、中国人類学への貢献によって、中国の学界をこえて、『普通人類学』(世界人類学)に貢献するより直接的な道を見出すことができよう。そして、本土化の戦略を通して、われわれの学科の世界化が実現できるもっとも良い方法かもしれない。

さらに、台湾の学者喬健教授は「民族の多元化と多元的な文化」を発表され、「民族」(nationality)と「族群」(ethnic group)、文化と多元的な文化、人権(human rights)と「群権」(group rights)について議論した。

中国国内の人類学者黄淑娉教授は「理論・実践・人材?人類学の中国化について」を発表し、人類学の理論面の建設、中国の実情に合った人類学研究、および人材の育成という三つの側面

から論点を展開した。

人類学の中国化という主張をいち早く打ち出したのは、1930年代の呉文藻先生であった。『実際には、三つの主な仕事がある¹⁾。は有効な理論的枠組を見つけること²⁾。この理論を用いて、中国の国情を研究すること³⁾。このような理論を通して、中国の国情を研究する独立科学の人材を育てること。』

呉先生は生涯、その主張を貫かれた。西方人類学の理論、とりわけ機能主義の理論と方法を中国に紹介され、この手法こそ、中国の国情を研究するのにもっとも適していると考えられた。かれは人類学の理論と実際の現地調査とを結びつけることの重要性を深く理解され、『実地研究から始まり、実地研究に終わる』、『理論とは事実を踏まえたものでなければならず、事実は理論に合わねばならない』ことこそ、機能主義の特徴だと指摘された。呉先生の指摘されたこの三つの仕事は今日の中国人類学にとって、依然としてもっとも重要なことであろう。

一方では、ここ50余年来、台湾の人類学者は実り多き成果をあげて、台湾社会の理解に大きく貢献してきた。1949年から1964年にかけての15年間、高山族の民俗誌研究に集中し、詳細なフィールドワークをおこなった。1965年から1970年代末ころにかけて、民俗誌学から社会人類学へとすすみ、漢人社会の文化研究に切り替わった。理論的にも歴史学派の影響下から次第に抜け出し、さらに機能主義およびその他の現代人類学派の諸理論を受け入れるようになった。さらに1980年代にはいつてから、高山族研究においては、現代社会と文化についての検討がなされ、漢人文化の影響下におかれた少数民族を研究するようになった。その理論面の特徴は、文化の内面的意味および象徴に関する考察である。

また、1980年代初頭から、台湾の学者たちが社会科学および行為科学研究における『中国化』という問題を提起した。その研究対象が中国社会と中国人だが、しかし、用いられる理論と方

法はほとんど欧米式、または欧米式的なものであった。

われわれは吸収と模倣という学習段階をのりこえていく必要があり、中国の観念を用いて中国社会と文化を研究しなければならない²⁾。』ほかにも興味深い発言や議論が多くおこなわれたが、紙面の関係でここでは割愛することにした。

3日間の発表や議論を拝聴して、強く印象に残った点がいくつかある。今回の参加者に限つていうと、明らかに「少壮派」と「年配派」というふう意見の食い違いがはつきり現われているように感じた。

ここでいう「少壮派」とは、30歳前半から40歳代前半の年齢層をさすが、「年配派」とは、50歳後半以上の方々を指している。なお、両者の間にはちょうど10数年あまりの断層が存在している。その理由は周知のとおり、文化大革命によるものである。

なお、最終日には、台湾の喬健教授がシンポジウムを総括し、非常に率直に感想、あるいは不満を述べられた。中国では、「務実」と「務虚」という両派がある。しかし、今回のシンポジウムはどちらかといえば、残念ながら、やはり「務虚」的なところが多かった。つまり、空談義的な議論が多かったと、遺憾の意を隠せなかった。

今回のシンポジウムの成果について、筆者も喬健教授と同感である。年齢的に筆者もこの「少壮派」に入るので、かれらの焦燥感がわからないでもない。だが、この世代に共通して欠けている部分がある。それはおそらく年配層によく指摘されるように、国学の教養があまりにも低いということにはほかならない。つまり、何がみずからの文化伝統なのか、まだ理解できていないのではないだろうか？ 古人いわく「知彼知己、百戦不殆」。相手を知り、己を知ってはじめて、戦の勝利を勝ち取ることができるというのである。

改革・解放後の中国では、簡単に海外留学ができるようになった。外国語に通じる若い世代

にとって、欧米の理論を受け入れることに対して、そう抵抗がないのかも知れない。しかし、それを十分に消化し、自分のものにしなければ、結局、中国社会を理解するのに、根本的な問題解決にはならないのである。

話がかわるが、筆者にとって、とても魅力的な日本の東洋学者がいる。文字学・古代学の大家である白川静先生である。梅原猛氏のことを借りれば、白川先生は「東アジア世界で発展させられた形象文字、漢字の背後に、もっぱら神々への畏れによって支配されていた人々の世界観を見たのである。それは柳田、折口によって発見された民俗学研究成果とはほぼ結論を同じくしている」。恐竜ともいわれた白川先生の漢字文化に関するほかに類を見ぬ深い研究は、中国人類学者にとっても、大きなヒントを与えてくださることであろう。

中国の人類学・社会学分野についていえば、呉文藻先生、費孝通先生をはじめ、われわれの先学たちも若きころ欧米へ留学し、学問的には西方文化の洗礼を受けたといえよう。しかし、その洗礼を受けたあとのかれらは一層の輝きを放し、素晴らしい研究成果を後世に残してくれた。中国社会に関するかれらの一連の著作は学徒たちにとって必読の古典として、そして中国という複雑社会を解説する鍵的な存在として、いまもなおその輝きを失っていない。

かれらは欧米社会に根ざした理論をしっかりと吸収し、みずからの大切な栄養とした。この先学たちの業績のすばらしさは、外の世界にも通じている一方、祖国に対しては、常に熱いまなざしを向け、深い思いを抱き、中国という大地にどっしりと根をおろしていることであろう。そしてこの「郷土中国」という古井戸から、こんこんと湧き出でる泉を汲み取り、次々と新たな発見ができたのである。かれらは欧米一辺倒に走ったり、盲目的に西方文化に追随するようなことは決してしなかった。

そこで筆者が言いたいのは、もしも少壮派という世代は自文化の素養向上に努めれば、欧米

生まれの諸理論に接する際、もう少し違った結論に達することができたかもしれない。あるいはもう少し本物の自信が持てたのではないだろうか。30歳代後半から40歳代前半という世代は、自分がまだ若いつもりでも、朝日のようなうら若き若者からみれば、もうとうに正午の太陽に見えたかもしれない。日差しがもっとも眩しく感じられるものの、年齢的には間違いもなく人中年に到りつつあるのである。

「要沈住気、多読幾本書、多做点田野」。費孝通先生がいつも後進の若者たちをこのように諄諄と論してきたという。もう少し落ち着け、あせるなよ。なるべく文献をたくさん読み、そしてフィールドワークを重ねるように。というのが先学のわれわれへの、実に耳に痛い鞭撻である。この先学の世代に比べて、少壮派たちの多くはあまりにも「温良恭儉讓」（謙虚な姿勢）という中国文人の伝統的な美德にも欠けているのではないだろうか？いくら博聞強記でも、たくさん著作をこれまで世に問うことができて、ただの人としての謙虚な気持ち、民衆に学ぶという基本姿勢は忘れてはなるまい。

それから、人類学という学問が確かに応用学科としても、極めてその有効性が認められる。とはいえ、人類学は決して「万金油」（万能薬）ではない。56の民族を抱える多元国家である中国社会の歴史・文化をより深く理解するには、既成の人類学の知識だけでは物足りないものである。歴史学・考古学・民俗学などの隣接分野における層の厚い研究成果の数々を大いに吸収すべきであろう。

中国では、「文史不分家」という古くからの学問に対する伝統がある。つまり、文学や歴史の研究者は互いに切っても切れぬ関係にあることを意味している。おそらく人類学についても、同様なことがいえよう。

最後に、費孝通先生のコメントをもう一度拝借したい³⁾。

「わたしは自分が人類学分野における野生の馬（a Wild Horse in the Field of Anthropology）だと

思う。つまり、いかなる束縛も受けない自由な発想でいたい。野生の馬にたとえたのは、学問をするには、異なる学科の枠をこえて考える勇気をもつことである。教わった先生の講義内容に限定されずに、物の考え方はいかなる境界(boundaries)ももってはならないということである⁴⁾

筆者にとって、費教授のこのことばは非常に刺激的で強く心を打たれたものであり、共感をおぼえた。確かに、野生の馬のような自由な発想法は誰にでもできるものではない。あるいは費教授のような中国社会の真の良き理解者で、人類学の大家であればこそ実現できたのかもしれない。そのような境地に達するためには、国学の高い素養が必要であることはいうまでもない。そして、単なる知識の累積ばかりでなく、もっとも重要なのは「老百姓」(庶民)に対する深い関心と暖かいまなざし、何事に対しても抱く素朴な疑問および鋭い観察眼であろう。

われわれはいったい何のために人類学を志しているのか？ 時には思いきって原点にたちもどる勇気も必要であろう。この問いに対して、費教授がすでに明確な答えを出されている。「志在富民」(その心は民の暮らしを豊かにすることにある)。一方では、日本民俗学の父といわれる柳田国男にとって、「農民がなぜ貧しいのか？」という疑問を解くことがその民俗学の原点であった。柳田は日本民俗学を「経世済民の学」と定義した。これは広い意味での人類学の研究目的とは、期せずして一致していることがまことに興味深い。

いずれにしても、若い世代にとって、焦らず

功利を求めず、文献を読みあさるかたわら、地道なフィールドワークを重ねていくことがとても大事である。そうしているうちに、自分なりの理論的枠組も浮かび上がってくるであろう。そして、先学たちからバトンを受け継ぎ、目標に向かって燃え尽きるまで全力疾走すればよい。その過程で、各自の持ち味を十分に発揮できればと思う。

なお、このシンポジウムのあと、参加者たちの発言が論文集の形で結集され、『人類学本土化在中国』の続編として近いうちに刊行される予定である。乞うご期待。

注

- 1) このシンポジウムへの主な参加者の専門分野を知るため、いちおう、筆者のわかる範囲内で各自の代表作を中国語で括弧内に明記しておいた。出版社・刊行年の確認できなかったものや記載漏れが多数あることをお許し願いたい。
- 2) 李亦園「民族誌学と社会人類学 - 台湾人類学研究と発展における若干の趨勢」喬健主編『中国における社会学・人類学の発展』『新亞學術集刊』第16期:55-80 香港中文大学新亞書院 1998
- 3) 費孝通「従人類学是一门交叉的学科谈起」(Talking about Anthropology as a Cross-Discipline) 榮仕星・徐傑舜主編『人類学本土化在中国』:17 廣西民族出版社 1998
- 4) 蕭紅燕「本格的な人類学時代の到来」(書評)『中国圖書』10月号:11-13 内山書店 1999